

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 5 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22610006

研究課題名（和文） 中1ギャップ対策としての野外教育活動の成果分析

研究課題名（英文） Effect of Outdoor Educational Program for the Gap of First-Year's Students in Junior High School

研究代表者

平野 吉直 (HIRANO YOSHINAO)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：40293534

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、中1ギャップ対策としての野外教育活動の成果を明らかにすることである。本研究では、野外教育プログラムを企画し、3中学校を対象にプログラムを実施した。また、中1ギャップを乗り越える力を測定する調査用紙を作成し、プログラムの実施前後の調査をとおしてプログラムの成果を分析した。さらに、プログラム直後に実施した生徒へのふりかえりシートの内容と、研究対象校の引率教諭へのインタビュー調査を通して、プログラムの成果を分析した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the effect of outdoor educational program for the gap of first-year's student in junior high school. This study was prepared the effective outdoor educational program and practiced it with 3 junior high schools. This study was prepared the scale to examine overcoming ability for the gap of first-year's student in junior high school. The scale was designed for each program at pre- and post-tests. This study was to examine the effect of outdoor educational program through the analysis of reflection sheets which were written by students just after the program and the analysis of interview for teachers in charge.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：野外教育

科研費の分科・細目：子ども学（子ども環境学）

キーワード：運動・遊び

1. 研究開始当初の背景

中1ギャップとは、中学1年生で不登校やいじめ等の集団への不適応が急増するという現象である。文部科学省の「平成20年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によれば、不登校の児童生徒は、小学校児童の0.32%であるのに対して、

中学校生徒は2.89%と高く、中学生の学校への不適応の割合が高いことを示している。また、平成18年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によれば、いじめの認知件数を学年別にみると、小・中・高等学校をとおして中学1年生が24,023件で最も多いことが報告されている。中央教

育審議会教育課程部会（2006）の議事録では、「人間関係の希薄化、集団のために働く意欲や生活上の諸問題を話し合っ解決する力の不足、規範意識の低下などが顕著になっており、好ましい人間関係を築けないことや、望ましい集団活動を通じた社会性の育成が不十分な状況が見られる」とし、中1ギャップなど集団への適応にかかわる問題点を指摘している。

本研究において、中学校入学直後の生徒を対象に集団宿泊活動で実施する「イニシアティブゲーム」は、A S E（Action Socialization Experience）とも呼ばれ、仲間づくり、他者とのコミュニケーションを図るゲーム（アクティビティ）である。グループの仲間と協力し、アイデアを出し合い、失敗をくり返しなが課題を解決する過程の中で、様々な学びや気づきを体験できる活動として、従来から教育的なキャンプ等において実施されてきた。「イニシアティブゲーム」は人間関係の希薄化や体験不足が社会問題として取り上げられている今日において、子どもを対象とした野外教育活動だけでなく、プロスポーツ（サッカーJリーグ）のセルフディスカバリー（自己発見）やチームビルディングに活用されたり、企業の幹部職員研修に利用されたりするなど、近年大きな注目を集めており、小学校5・6年生及び中学校の体育における「体ほぐしの運動」にも活用され始めている。

申請者は、中1ギャップの問題を抱える長野県内のいくつかの公立中学校からの依頼を受け、2005年から現在まで継続して、イニシアティブゲームなどの人間関係づくりをねらいとした自然体験活動（以下、コミュニケーション学習プログラム）を指導してきた。継続的な指導実践の中で、中学校1年生向けのコミュニケーション学習プログラムが構築されつつある。また、実施対象校のコミュニケーション学習プログラムに対する評価は高く、実施後に、「クラスの凝集性が高まった」「不登校の生徒が減少した」「教師との人間関係が改善された」などの報告を受け、今後の継続指導を依頼されている。

これまでコミュニケーション学習プログラムを実施した長野県内の公立中学校の成果については、日本野外教育学会第11回大会において、「中1ギャップに対応した野外教育活動の成果」というテーマで、実施後、生徒の「生きる力」が向上したことともに、生徒のふりかえりシートの分析から自他ともに多くの発見をしていたことを研究発表した（2008年）。また、愛知県の公立中学校2年生を対象にしたコミュニケーション学習では、実施前後で「生きる力」が向上し、その向上は実施後2か月後までも維持されていたことなどを、日本野外教育学会第11回大会において研究発表した（2006年）。さらに、公立中学校における

実践内容を日本野外教育学会第10回大会において研究発表した（2007年）。これらの研究では、コミュニケーション学習プログラムの成果を分析しているものの、一部の引率教員へのインタビュー調査の分析であったり、生徒の実施後の感想の抜粋であったり、申請者が作成した生きる力を測定する尺度（子どもI K R 評定用紙）を用いたものであるなど、学術的かつ多面的な分析にまで至っておらず、加えて、望ましい人間関係への変化を的確にとらえた研究であるとは言い難い。

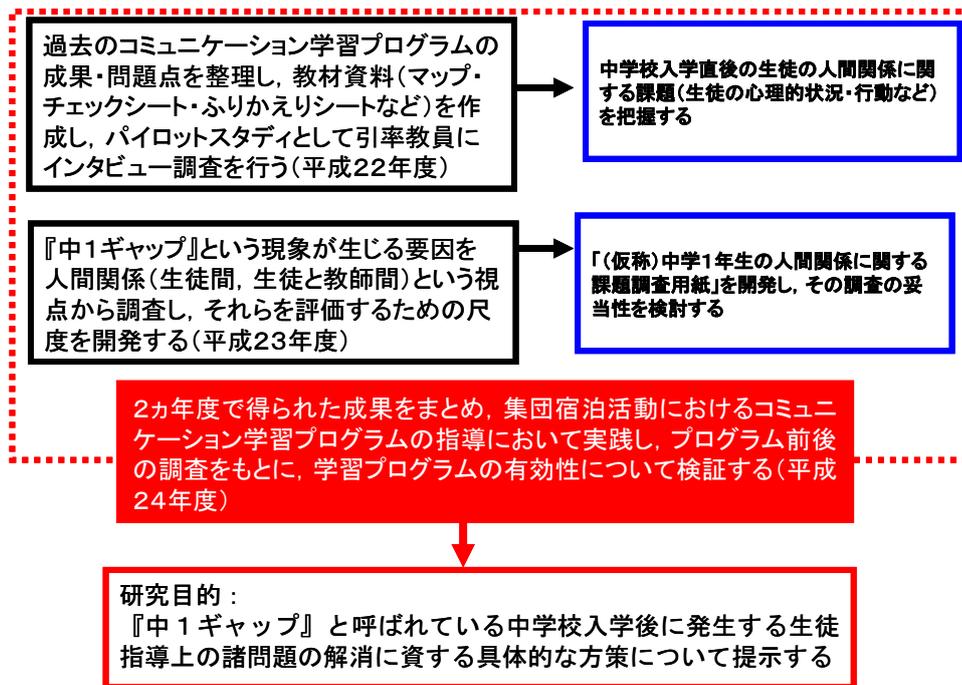
本研究では、これまでの実践的な指導・研究発表等から得られた成果をもとに、中1ギャップの解消に資するコミュニケーション学習プログラムの開発をさらに進め、同時に、生徒や担任教師へのインタビュー等の調査内容・方法を吟味し、プログラムの有効性を多面的に分析していきたい。また、中1ギャップという現象が生じる要因を人間関係（生徒間、生徒と教師間）という視点に絞り込み、中学校入学直後の生徒にはどのような人間関係に関する問題点が内在しているのかを調査し、これら問題点を評定することのできる尺度を作成していきたい。

2. 研究の目的

- (1) 中学校入学直後の生徒を対象に、いくつかの中学校の協力のもとで実施する集団宿泊活動において、イニシアティブゲームなどの人間関係づくりをねらいとしたコミュニケーション学習プログラムを指導する。これらの活動後における生徒間の人間関係、担任教師と生徒間の人間関係の具体的な変化を明らかにする。
- (2) 中学校入学後における人間関係の問題点等の具体的な事例を、広く中学校教師を対象に調査・収集し、中学生の学校における人間関係の課題を分析できる評定尺度を作成する。
- (3) 本研究は、これらの実践・調査をとおして中1ギャップと呼ばれている中学校入学後に発生する生徒指導上の諸問題の解消に資することを目的とする。

3. 研究の方法

- (1) 長野県内の公立中学校におけるこれまでの指導実践内容を整理するとともに、それらに参加した教員に対するインタビュー調査、さらには、これらに指導補助として関わった大学院生とのふりかえり等から、コミュニケーション学習プログラムを開発する。
- (2) 研究対象中学校の1年生に、コミュニケーション学習プログラムを実施するとともに、生徒へのふりかえりシート、担任教師へのインタビュー調査等を実施し、学習



プログラムの成果を多面的に分析する。

- (3) 研究対象中学校等の教員を対象に、アンケート調査を実施し、それらの調査結果をもとに、中学校入学後の生徒の人間関係に関する問題点を評定することのできる尺度を開発する。
- (4) 開発した評定尺度を用いて、コミュニケーション学習プログラムの有効性を分析する。

なお、上図は、年度ごとの研究課題と研究目的の関連性について示したものである。

これらを遂行する研究体制は、研究代表者(申請者)が調査や指導実践の構想・指揮を執り、研究協力者として10名程度の大学院生(信州大学教育学研究科 教科教育専攻 保健体育専修)に指導実践の補助の協力を仰ぐ。

4. 研究成果

(1) 学習プログラムの開発と実施

- ① 過去のコミュニケーション学習プログラムの実施内容を指導補助として関わった大学院生とともに整理し、実施内容等を検討した。
- ② 研究対象校に出向き、過去のコミュニケーション学習プログラムに参加した教員へのインタビュー調査等とおして、これまで実施したプログラム内容の成果・問題点を検討した。
- ③ コミュニケーション学習プログラムを確定し、そのための教材資料(プログラム実施に必要なマップ、チェックシート、ふりかえりシートなど)を作成した。

- ④ 平成22・23年度は2校、平成24年度は3校の集団宿泊活動におけるコミュニケーション学習プログラムの指導に当たった。

(2) 評定尺度の開発と成果分析

- ① 中1ギャップを乗り越える力を測定する調査用紙を作成するため、プログラム実施中学校等の教員を対象に、中1ギャップを克服できる生徒の具体的な特徴や行動について予備調査を実施し、予備調査で収集した具体的な特徴や行動の項目を精選し、36項目からなる「中1ギャップを乗り越える力調査用紙」を作成した。
- ② 学習プログラムに参加した中学校1年生を対象に、「中1ギャップを乗り越える力調査用紙」をプログラムの実施前後に実施し、プログラムの成果を分析した。

(3) 学習プログラムの成果分析と評定尺度の開発

- ① コミュニケーション学習プログラム直後に実施する生徒へのふりかえりシートの内容を整理し、生徒に及ぼしたプログラムの成果を分析した。
- ② 研究対象校へのインタビュー調査を通してプログラムの成果を分析した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

- ① 小林祥之、平野吉直、大日方彩香、中学一年生を対象としたコミュニケーション学習の成果～中1ギャップに着目して～、日本野外教育学会第15回大会、2012年7月

8日、沖縄キリスト教学院大学

5. 研究組織

(1) 研究代表者

平野 吉直 (HIRANO YOSHINAO)
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：40293534

(4) 研究協力者

小林 祥之 (KOBAYASHI YOSHIYUKI)
信州大学・教育学研究科・大学院生
研究者番号：なし

大日方 彩香 (OBINATA AYAKA)
信州大学・教育学研究科・大学院生
研究者番号：なし